

平成29年3月31日

研究開発完了報告書

住所 東京都小平市たかの台2番1号
管理機関名 学校法人 創価学園
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成28年 6月 1日（契約締結日）～平成29年 3月31日

2 指定校名

学校名 創価高等学校

学校長名 木下 清一

3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

4 研究開発概要

○【言語技術】

日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成

○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成

○【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			○				○				○	

②日本語・英語による作文の技術のトレーニング【パラグラフ形式で文章作成】

③日本語による説明の技術のトレーニング【ラベリング・空間配列・時間配列・概要から詳細の説明へ等】

※技術の習得状況を確認し、習得を促進するため、対話の技術に関しては生徒全員を対象に口頭試験を実施した。また、作文の技術に関しては、1年間で15本ほどの作文を生徒に書かせた。それらの作文を、教員が一人ひとり添削・コメントし、フィードバックした。

○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】（全校生徒対象のプロジェクト）
「世界を知る 私を知る 世界の平和のために私は何ができるか」をテーマに掲げた。

①1年生は「環境、貧困、食糧問題」を、2年生は「戦争、冷戦後の紛争、人権」を、3年生は「環境、国際会議」等を探求テーマに設定し、地球規模課題に対する探求学習を進めた。

②学期に2回（5月、7月、10月、11月、1月、2月）、GCPの時間を設け、運営は、全校生徒からの希望者で構成されたGCPリーダーズによって行われた。

③3年生は、2年後に現一年生が行う予定である課題研究「ファイナルプロジェクト」の二言語（日本語・英語）でのポスターセッションを先行実施した。

○【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】（選抜生徒16人対象のプログラム）
は、毎火金の18時～19時30分に、地球規模課題に関する探究型学習を行った。

①地球規模課題に関する議論と講義に加え、アクティブラーニングやプレゼンスキルを活用した探究型学習を実施し、問題の理解と論理的な議論を展開した。

②沖縄とカリフォルニアで実施されたフィールドワークでは事前に仮説を設定し、論証のために必要なアンケート調査を実施し、論理的・分析的思考を高めた。

③報告会は全て英語で実施し、SkypeやYoutubeなどのSNSを利用して海外との交流や情報発信を行った。

○【その他】

①国内外フィールドワーク（全校生徒より希望者）：GCP、GLPで定めた各テーマに則り、カリフォルニア、沖縄、広島、岩手、東京（国連大学、国立ハンセン病資料館、JICA等）を行った。また、カリフォルニアで行われたCIF（Critical Issue Forum）に参加した。

②グローバルセミナー（全校生徒対象のセミナー）：国内外から著名な識者を招聘し全校生徒を対象としたセミナーを開催した。4月1回、5月2回、7月1回、11月2回と6回行った。

③イングリッシュキャンプ（全校生徒より希望者）：創価大学にて1泊2日で実施した。

④本年度の主な受賞は次の通り

ジャパントイムス主催の英字新聞コンテストで英字新聞賞（優勝）、NRI(野村総合研究所)学生小論文コンテストで優秀賞、手帳甲子園で優秀賞他各賞受賞、人間の安全保障学会ポスターセッションで奨励賞

7 目標の進捗状況、成果、評価

【言語技術】

- ①年度末に1年生全員にアンケートをとり、対話・作文・説明の各技術の重要性・有効性を感じたかという質問に対して、60%前後の生徒が「大変そう思う」「かなりそう思う」と回答した。「まあまあそう思う」という回答まで含めると、全体の95%を占めるに至った。また、同じアンケートにおいて、日本語と英語の構造における相違点や共通点を意識するようになったと回答した生徒は75%おり、日本語で学んだ言語技術を英語の授業で活用できたと回答した生徒は79%いた。
- ②英検2級のライティングのCSEスコアでは、1年間言語技術を受講した1年生が未受講の2、3年生より高かった。
- ③各教科の授業やクラスでの話し合いの場面では、生徒たちが結論・理由の順番で発言し、ナンバーリングを用いることにより、議論の進行がスムーズになり内容も濃いものになっている。
- ④英会話の授業や英作文の課題において、発言する際や文章を書く際の「型」を学んだ結果、これまでの生徒たちに比べ、より積極的に話し書いている姿が見られる。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①SGHアソシエイトの昨年度に「国連2030アジェンダ」について、全校生徒へ導入的なレクチャーを行っており、それがベースともなって、1年目の取り組みはおおよそ順調に進んだ。特に、2年後の実施を目指す高校3年生の課題研究「ファイナルプロジェクト」の先行実施を行うことができたことは大きな成果となった。日本語でのレポート作成から始め、成果をポスターとしてまとめ、最終的に、日本語・英語の二言語でのポスターセッションを実施した。1、2年生への公開も行い、1、2年生が来年度への意欲を高める機会ともなった。
- ②2月に行ったアンケートでは、「地球的問題・課題（紛争・人権・環境・貧困等）についてのニュースに興味がありますか」との問いに、5月では「あてはまる」と答えた生徒が32%だったのに対して、2月の結果では55%と大きく上昇し、「どちらかといえばあてはまる」を含めると90%となった。このように、地球規模課題に関する全校生徒の意識は大きく向上した。また、協調的な探求学習の手法を多数用いたが、その成果として、「さまざまなワーキングにおいて、友達と協働して話し合っただけで回答を出すことができたか」との問いに対して、5月には、18%が「あてはまる」と答えたのに対して、2月には実に41%の生徒が「あてはまる」と回答し、「どちらかといえばあてはまる」を含めると86%となった。生徒間で協働して答えを求めていく姿勢が身につけてきていることを示している。
- ③GCPの運営を担ったGCPリーダー（生徒の希望者で構成）は半年交代制をとり、前期は112名、後期は126名の生徒が集った。そのうち約70%が前期からの継続を希望したメンバーであったことから、生徒主体に運営を行う体制が成果をあげていることがわかる。

【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

- ①フィールドワークに向けて、仮説を立てて進めることで、論理的かつ分析的な探究型学習を実施することができた。
- ②オープンキャンパスや、学園祭などでポスターセッションを実施し、公開された空間でのポスターセッションの機会を多く持つことができた。また中間報告会および最終報告会において、英語のプレゼンテーションを実施した。
- ③フィールドワークまでの研究成果をまとめて作成した英字新聞は、ジャパントイムズ主催の第1回全国中学高校生英字新聞コンテストにおいて、大賞である「英字新聞大賞」を受賞した。

- ④核問題について全員で取り組むことで、4月に実施される、カリフォルニア・ミドルベリー国際問題研究所の主催する、核廃絶に関する高校生による国際会議、クリティカル・イシューズ・フォーラムの取り組みで、2年生が英語によるプレゼン作品を作り上げることができた。

<添付資料> 目標設定シート

8 次年度以降の課題及び改善点

【言語技術】

- ②年度末のアンケートでは、95%の生徒が言語技術の重要性・有効性を実感しているものの、言語技術を他の場面で活用できるようになったかという質問に対して、「そう思う」と回答した生徒が、対話の技術で74%、作文の技術で84%、説明の技術で76%と、割合が少し下がっている。言語技術の授業内だけで活用できる力を向上させるには限界があるので、他の教科と連携し言語技術を活用する場面を増やしていく。そのため、全教員に対する言語技術の研修会等を実施する。
- ③1年生約350人の生徒に書かせた作文の添削を、正教員1名と非常勤講師2名の体制で行った。来年度以降、人員の増強を図りきめ細やかな文章指導を行っていく。さらに、評価のためのルーブリックや、自己・相互による評価方法の改訂・開発も推進する。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト (GCP)】

- ①さらに多くの生徒が実感し、自らの進路選択に役立てていけるように内容を一層向上させていく必要がある。例えば、国内外のフィールドワークの参加枠を拡大し、より多くの生徒が実感を持った学びを進められるような機会が必要である。
- ②3年生が実施したファイナルプロジェクトでは、テーマの設定やレポートの添削を、担当教員とCWCの教員3名で行ったが、より細かな指導が行き届くために人員の増強を図りたい。また、成果をまとめたポスターを校内発表から外部へ発信していけるような工夫を行いたい。

【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】

- ①仮説に基づくフィールドワークは、探究型学習の取り組みとして大変に有意義なものとなったが、訪問地をカリフォルニアと沖縄に絞ったことで、地球規模課題と関係したテーマの設定が難しくなった。またSGH採択1年目ということもあり、フィールドワークの実施までの日程が限られてしまった。2017年度は早めに取り組むことができ、地球規模課題と関連した幅広いテーマ設定ができるよう取り組む。
- ②評価方法として、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させた。ただ、この資質・能力の基準について、事前に提示しておく必要性を感じた。2017年度はこの評価表をすでに提示しており、生徒たちに獲得する資質・能力について意識させながらプログラムを進めていく。

【担当者】

担当課	経理募金課	TEL	042-342-2611 (代)
氏名	山下 英一	FAX	042-342-2617
職名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp

